

1985年に刊行、世界各国で読まれ期待と注目を集める建築論の通史の日本語版

LIBRO QUARTO

127

# 建築論全史

— 古代から現代までの建築論事典 —

ハインリッヒ・ヴァルター・クルフト 著

竺  
覚  
暁  
訳

〈全二巻〉

中央公論美術出版

刊行

第一巻 2009年9月

第二巻 2010年春

# 建築論全史 I 目次

## 序 建築論とは何か

第1章 ウイトルウィウスと古代の建築論

第2章 中世におけるウイトルウィウスの伝統と建築論

第3章 レオン・バツティスタ・アルベルティ

第4章 アルベルティ以後の十五世紀建築論

第5章 ルネサンスにおけるウイトルウィウスの伝統

第6章 十六世紀における独断論化

第7章 パラディオと北イタリアの人文主義者たち

第8章 反宗教改革、アカデミズム、バロックと古典主義との間

第9章 築城論

第10章 十六世紀フランスにおける展開

第11章 十七世紀フランスにおける独断的古典主義への途

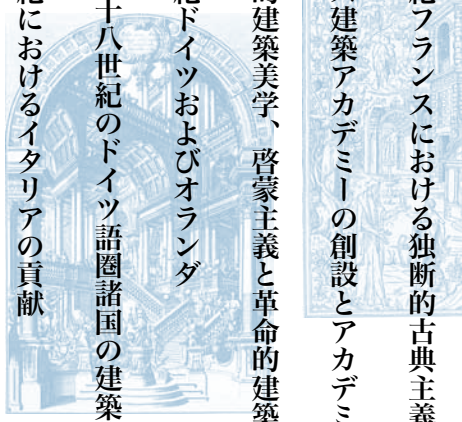
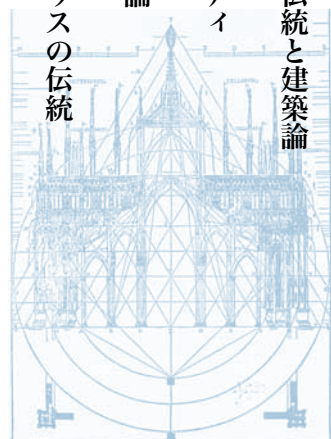
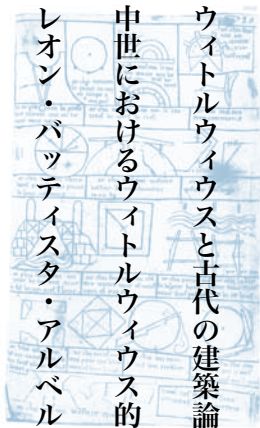
第12章 フランス建築アカデミーの創設とアカデミズム独断論の危機

第13章 相対論的建築美学、啓蒙主義と革命的建築

第14章 十六世紀ドイツおよびオランダ

第15章 十七—十八世紀のドイツ語圏諸国の建築論

第16章 十八世紀におけるイタリアの貢献



**本**書は、ウイトルウィウスから現代にわたって記述された建築論を通じて、建築がいかに建てられ、いかなる法則によって構築されてきたのか、を全史的に論じた通史である。

建築は実用目的のためだけではなく、時代の美的な要請や支配層・施主の意思、意向を受けた建築家の総合的思想の表明として設計されているので、建てられた当時の時代背景・思潮を如実に現わしている。

**各**々の時代に種々の建築書に表現された建築論を知ることは、当時の建築がどのような思想的・物質的営為のみならず、社会・政治・宗教・風土・習俗・権力構造などによって、換言すればどのような「時代精神」によって構築されてきたかを教えてくれるのである。

**さ**らに言えば、歴史上、広大な影響をふるった建築書が、時代や現実や思潮を変革してゆく象徴的な契機になったことは、様々な事例から明らかである。

**時**代を構築してきた特質を語り、建築意匠・構造のなかに建築書に論じられたことの痕跡を解読することが、本書の大きな目的である。

『建築論全史』は、それらのことを知るための、現在存在する唯一、かつ最も広範な建築論の通史であり、建築論事典としても用いることが出来る、建築論の全貌を一望のもとに把握したい読者の便宜のために編纂された労作であり、一大金字塔である。

『建築論全史』は、それらのことを知るための、現在存在する唯一、かつ最も広範な建築論の通史であり、建築論事典としても用いることが出来る、建築論の全貌を一望のもとに把握したい読者の便宜のために編纂された労作であり、一大金字塔である。

『建築論全史』は、それらのことを知るための、現在存在する唯一、かつ最も広範な建築論の通史であり、建築論事典としても用いることが出来る、建築論の全貌を一望のもとに把握したい読者の便宜のために編纂された労作であり、一大金字塔である。

『建築論全史』は、それらのことを知るための、現在存在する唯一、かつ最も広範な建築論の通史であり、建築論事典としても用いることが出来る、建築論の全貌を一望のもとに把握したい読者の便宜のために編纂された労作であり、一大金字塔である。

『建築論全史』は、それらのことを知るための、現在存在する唯一、かつ最も広範な建築論の通史であり、建築論事典としても用いることが出来る、建築論の全貌を一望のもとに把握したい読者の便宜のために編纂された労作であり、一大金字塔である。

第17章 十八世紀における古代建築に関する書物の出版

第18章 十六世紀から十八世紀までにおけるスペインの貢献

第19章 英国における十六世紀から十八世紀までの展開

第20章 庭園論

建築論全史 II 目次

第21章 十九世紀フランスとエコール・デ・ボザール

第22章 十九世紀ドイツ

第23章 十九世紀英国

第24章 アメリカ合衆国…トマス・ジェファソンからシカゴ派までの建築論

第25章 十九世紀末から第二次大戦終結までの中部ヨーロッパ建築論

第26章 一九〇〇年から一九四五年までのフランス

第27章 イタリア…未来派と合理主義

第28章 ソヴェエト連邦

第29章 二十世紀前半のアメリカ

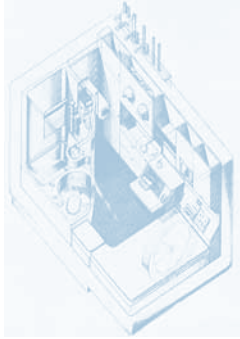
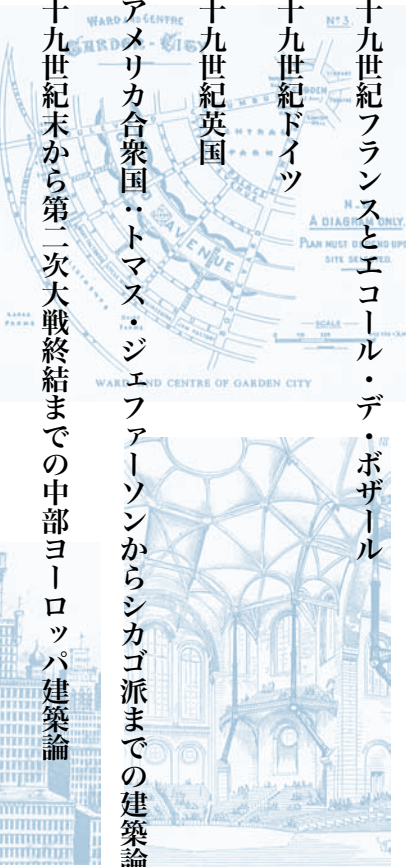
第30章 一九四五年以降の建築論傾向

註

訳者あとがき

参考文献

索引



第16章 十八世紀におけるイタリアの貢献



図版124 ジョヴァンニ・パッツィスタ・ピラネージ、『建築についての意見』、カット（ヴィネット）、「所見」（1765年）所収

イダスカロをして次のように言わしめている。「ピラネージは昨日、一つの見解を示し、今日は別の見解を示す。だからどうだと言うんだ？ピラネージは明らかに挑発的であることを意図している『意見』の最初のページのロンドン古物研究家協会（ゼネラーツ）はその会員であった。への献辞の付されたヴィネット挿画とその『誤った』比例および『不適切な』装飾さえもが商業的なものであって、冒頭にイダスカロによってなされた主張、過度に装飾を施された建築は何世紀にもわたって『戦的であつた』という主張を支持することを意図したものであつた（図版124）。イダスカロは、建築は批評家ではなく公衆を喜ばせることを意図しているものであると、建築の規則を定めるのはワット・ウイウスでもパラーディオでもなく、それは慣習である（D'Usses）…用が法を作る。前者によって提示されたものであるような規則はこれまで存在したことには決まらなかったものである。イダスカロは、縮減に従つて狂気の自由（quasi libertati licentiae expansion）の擁護者として自らを規定し、『原始の小屋』の基礎的構成要素へと、何も残らなくなるまでに建築を削り落とし続ける厳格主義者連に反対するのである。これは、ロードリやロージェに対する明々白々な当てつけである。『壁も柱もなく、付柱もフリーズもコーニスもなく、穹窿も屋根もない建築（これは、広場だ、広場、太陽に照りつけられて、灼けた大地だ。』この種の『厳格主義の』建築、それが単純であるのと同様に簡單（tanto più facile quanto più semplice）」な建築は人々が嫌う単調さを結果する。とイダスカロは言ひ、オーダーのシステムは廃止さ



図版123 ジョヴァンニ・パッツィスタ・ピラネージ、『所見』（1765年）、表紙紙

のエトルリア・ローマ論を強調するために用いた。例えばこのことは、アルバーノのジョヴェ・ラツィアレ神殿に関する彼の論評のうちにも示されている。この神殿の壮麗さは彼の『アルバーノ』古代都市（Antichità Urbane）（一七六四年）の中で詳しく図示されている。ピラネージの言語簡潔な歴史構築への答えは、一七六四年に、ジャン・ピエール・マリエットによって、彼が『ヨーロッパ文芸雑誌（Gazette Littéraire de l'étranger）』に寄せた書簡の形でもたらされた。マリエットは、エトルリア人もまたギリシア起源であり、ローマ美術もギリシア起源であつて、それは主としてギリシアの紋章によつて輸出されたと推測する。ギリシアの美しく高貴な単純性（beau et noble simplicité）および『良き趣味（bon goût）』は短い時間だけしか続かなかつた。ローマ人のおかげで、美術は滑稽かつ野蛮（ridicule et barbare）となつてしまつた、と言ひ、これはあらゆる点でピラネージの立場の対極である。ピラネージは遊年一冊の本全体でもってこれに反論した。論争的な論議は初期の著作よりも大いに鋭いものであつた（図版123）。そのタイトルページには筆耕マリエットの辛辣なカリカチュアが掲げられていた。その絵は、不快な手紙を書くマリエットの手にその上に掲げられた標語、「このいすれかと共に（Avec tant de）」を示し、一方歴史に支持された専門家としてのピラネージが、或いはこれにおいて（Avec tant de）」と答えているのを示している。彼は書物全体に、『ヨーロッパ文芸雑誌』の補遺を装った形を張り当ている。

ピラネージはマリエットの書簡に対して論点ごとに彼の旧来の見解を復唱しつつ答えるのである。彼はマリエットのギリシア人に関する句、美しく高貴な単純性を取り上げて、彼の『滑稽かつ野蛮な手法』でもって描かれた新しい図の主題に関する友人イダスカロとその相手のプロトビオの間の対話の締めくくりにある。このアラトンの対話の形で構成された『建築に関する意見（Discours sur l'architecture）』は、『所見（Observations）』（一七六五年）の不可分の一部分をなしてあり、マリエットの耳にすることを意図していた。この書物の中心部分はピラネージ自身によって冗談半分の『對話』であると語られている。

全二巻 セット定価 68,250円 (本体 65,000円+税) 予約申込受付中



書名 **建築論全史 I**

著者 ハンノ・ヴァルター・クルフト

訳者 竺 覚暁

サイズ: B5判 頁数: 440頁 図版: 151点

体裁: 上製本・函入り

定価: 31,500円 (本体 30,000円+税)

ISBN978-4-8055-0606-6 C3052

本書の特色

- \* 原著『Geschichte Der Architekturtheorie』は1985年に刊行され、各国語に訳され継続的に刊行され続けている。
- \* かつて、これほど包括的かつ広範囲に建築理論を扱った歴史書はなく、世界中の大学・研究機関で定評のあるスタンダードな教科書・参考書として建築史にかぎらず、人文関係の歴史書として広く購読されている。
- \* すでに英語圏・ヨーロッパ圏・中国・韓国・台湾・東欧などで翻訳が刊行され、その反響と影響は世界的に認知されている。
- \* 日本語版では2分冊(I・II)とした。原著では巻末にあった図版を本文に組み込み、参照しやすい構成とした。IIの巻末には詳細な事項索引を新たに作成、事典として機能するようにした。
- \* 収録文献…1,300件、人名採録…2,568件。

【著者略歴】

ハンノ・ヴァルター・クルフト  
(Hanno-Walter Krufft)



1938年デュッセルドルフ生まれ。1972年以降、ダルムシュタット工科大学で建築論史を教えた後、1982年アウグスブルク大学の正教授。『イタリア彫刻史』を著した他、ゲーテの時代の芸術と芸術理論および革新的な建築と建築理論の研究に定評がある。1993年ローマにて没。

【訳者略歴】

竺 覚暁 (ちく・かくぎょう)

1942年生まれ。1966年工学院大学建築学科卒。1969年富山大学文理学部文学科(哲学)卒。1981年金沢工業大学教授(現在に至る)。1984年工学博士(東京大学)。1985～1987年マサチューセッツ工科大学(MIT)客員研究員。1990～1991年米国議会図書館国際研修員。1996年金沢工業大学ライブラリーセンター館長(現在に至る)。2008年金沢工業大学建築アーカイヴズ研究所長(現在に至る)。主な著書に『建築の誕生—ギリシア・ローマ神殿建築の空間概念—』中央公論美術出版(1995年)

続刊

**建築論全史 II**

ハンノ・ヴァルター・クルフト 著  
竺 覚暁 訳

サイズ: B5判 頁数: 512頁(予定) 図版: 56点

体裁: 上製本・函入り

定価: 36,750円 (本体 35,000円+税)

ISBN978-4-8055-0607-3 C3052

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-7

電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取扱いは